

「令和8年度全国学力学習状況調査」の概要

はじめに:

今年度の調査において、牛久市は全教科で国・県の平均正答率を上回る、とても良好な結果を収めております。これは、本市が進めてきた「基礎基本の最重視」「個別と協働の一体充実」を基本とする様々な取り組みが、知識の定着と活用能力の両面で成果を上げていると思われます。以下の概要等は、市立学校全体の結果に基づくものであるため、個々の学校の結果等と一致しない部分もあることを、ご承知お願います。また、正答率等の詳細は公表できませんので、A(90%以上)～I(10%以上)で表しています。

第1部:学力調査の結果分析

1. 小学校の調査結果(国語・算数)

【小学校 国語】(平均正答率:全国をかなり上回っています／全国60.9%) 全13問中、以下の7問に注目し分析しました。

● 強みが見られた内容:

- 「話の構成(理由・事例)」(問1):正答率 C。相手に伝わるよう、理由や事例を挙げて構成を考える力が優れています。
- 「比喩・反復の表現」(問4):正答率 C。表現の工夫に気付く力が良好です。
- 「文章の種類・特徴」(問10):正答率 B。文章の性質を理解してとても良く読めています。
- 「考えのまとめ」(問13):正答率 C。理解したことを基に自分の意見をまとめる力が優れています。

● 課題が見られた内容:

- 「漢字の書き取り(使い分け)」(問8):正答率 H(全国 45.2%)。「不思議」という漢字に大きな課題があります。
- 「情報同士の関係理解」(問6):正答率 E。考えを支える理由や事例の関係を捉える力が不足気味です。
- 「引用と表現工夫」(問9):正答率 F。自分の考えを伝えるために引用を効果的に使う力が必要です。

- 今後の対策: 単なる暗記ではなく、書く目的や文脈に応じた「生きた漢字」の指導を強化します。また、複数の資料を関連付けて読む活動を増やし、情報の整理能力を高めます。

【小学校 算数】(平均正答率:全国をやや上回っています／全国56.4%) 全16問中、以下の8問から傾向を探ります。

● 強みが見られた内容:

- 「小数の仕組み」(問9):正答率 A。十進位取り記数法の基礎がほぼ完全に身に付いています。
- 「数量関係と時間の算出」(問14):正答率 B。情報を整理して時間を求める力が優れています。
- 「単位分数の理解」(問12):正答率 C。数の構成単位への理解が安定しています。
- 「四捨五入・概数」(問5):正答率 D。目的に応じた概数の扱いが良好です。

● 課題が見られた内容:

- 「単位量当たりの判断」(問7):正答率 G。混み具合などを除法で判断する応用力に課題があります。
- 「図形要素の把握・記述」(問4):正答率 F。辺の長さから数量の求め方を言葉で説明する記述力が不足しています。
- 「体積の意味」(問3):正答率 F。公式の適用だけでなく、体積の本質的な意味の理解が必要です。
- 「基準量・比較量・割合の図」(問8):正答率 G。割合の関係を正しく図解する力が不足しています。

- 今後の対策: 数の表し方の仕組みや単位に着目し、整数の計算に帰着させて考える力を養います。図や言葉を用いて解決過程を説明する活動を重視します。

2. 中学校の調査結果(国語・数学・英語)

【中学校 国語】(平均正答率:全国を大きく上回っています／全国63.9%) 全15問中、以下の8問を分析しました。

● 強みが見られた内容:

- 「描写による表現効果」(問9):正答率 A。登場人物の設定を捉える力が極めて高いです。
- 「助動詞の働きの理解」(問1):正答率 B。文法知識の定着がとても良好です。
- 「目的に応じた要約」(問14):正答率 C。必要な情報を選んでまとめる力が安定しています。
- 「質問による話の内容把握」(問5):正答率 C。聞き取りと内容把握の能力が優れています。

● 課題が見られた内容:

- 「文脈上の語句の意味把握」(問13):正答率 G。語句の辞書的意味を踏まえ、文脈に即して捉える力が不足しています。
- 「理解に基づく自分の考えの形成」(問15):正答率 F。根拠を明確にして自分の考えを深める記述に課題があります。
- 「表現の評価と改善」(問11):正答率 E。読み手の助言を基に推敲する力の向上が必要です。
- 「漢字の書きと語句の使用」(問8):正答率 F。文脈に即して漢字を正しく使う力に課題が見られます。

- 今後の対策: 読み手の立場に立ち、語句の用法や叙述の仕方を確かめて文章を整える指導を強化します。ICTを活用し、推敲を重ねる学習を充実させます。

【中学校 数学】(平均正答率:全国を大きく上回っています / 全国57.0%) 全16問中、以下の8問から論理的思考力を測ります。

- 強みが見られた内容:

- 「正・負の数による状況表現」(問1):正答率 B。数学的表現の基礎がとても良く定着しています。
- 「箱ひげ図と四分位数の理解」(問15):正答率 B。データの活用領域はとても優れています。
- 「考察対象の的確な把握」(問6):正答率 C。問題場면을的確に捉える力が優れています。
- 「表・グラフからの情報読み取り」(問9):正答率 C。必要な情報を抽出する力が優れています。

- 課題が見られた内容:

- 「証明における仮定の発見」(問13):正答率 F。証明の前提となる条件を見出す力に課題があります。
- 「解法の数学的な解釈・説明」(問10):正答率 F。(無解答率 29.2%)。数学的な説明に強い抵抗感が見られます。
- 「論理的な証明の遂行」(問12):正答率 E。(無解答率 18.7%)。筋道を立てて証明する力はさらなる強化が必要です。
- 「データ傾向把握と多角的説明」(問16):正答率 F。複数の特徴を基に判断の理由を説明する力が必要です。

- 今後の対策: 変化や対応の特徴を、表、式、グラフを相互に関連付けて考察する機会を増やします。証明学習では、見通しを立てて論理を組み立てるプロセスの指導に重点を置きます。

【中学校 英語】(平均正答率:全国をかなり上回っています / 全国54.6%)。全16問中、以下の7問から技能バランスを分析します。

- 強みが見られた内容:

- 「状況に応じた必要な情報の聴解」(問3):正答率 B。聞き取り能力は全国上位レベルです。
- 「日常の話題の情報聞き取り」(問2):正答率 B。基礎的なリスニング力が安定しています。
- 「読む:音声・語彙・文法の活用」(問6):正答率 C。読解の基礎となる知識が十分です。

- 課題が見られた内容:

- 「社会的短文読解と理由の記述」(問11):正答率 H(無解答率 10.4%)。難度の高い読解・記述に苦手意識が見られます。
- 「日常の話題におけるまとめある文」(問16):正答率 G。論理的な文章作成力が不足しています。
- 「書く:社会的短文読解と自分の考え」(問10):正答率 F。読解に基づいた発信力の強化が必要です。
- 「書く:言語知識を活かした伝わる表現」(問13):正答率 E。より正確で伝わる表現力が必要です。

- 今後の対策: 手書きとキーボードの両方で英語を「書く活動」を継続し、書くことへの心理的抵抗を減らします。即興的な対話活動を日常化し、さらなる発信力を高めます。

第2部:質問調査の結果分析

1. 「児童」(小学校6年生)の学習・生活

- 概要: 英語への自信と意欲が非常に高く(得意:33.4% vs 全国28.9%)、プレゼン資料作成等のICTスキルへの自信も全国を上回っています。
- 課題: 授業でのICT活用頻度は全国平均を下回っています(ほぼ毎日活用:12.9% vs 全国20.5%)。また、授業内での、いわゆる「承認欲求」に不満が多くみられます。
- 対策: ①ICTの利用頻度の低さは、「牛久市では3年前までICT利用率が極めて低かったことから、現6年生は推進移行期間にあるため」と、「市の現在の方針として、低・中学年ではアナログでの学習(手書きや身体性を通した学び)を重視している」ためです。②本市はICT(デジタル)一辺倒ではなく、アナログによる基礎固めが小学校高学年と中学校での高度なデジタル活用を支えるというバランスを大切にしています。今後は、高学年において「知的な道具」としてのICT活用を徐々に深化させてまいります。③時間的余裕がない中でも、正解を急ぐことを戒め、深い思考や言語化、個々の意見の尊重等を図ってまいります。

2. 「生徒」(中学校)の学習・生活

- **概要:** 中学校ではICT活用の日常化が劇的に進展しており(毎日利用:36.5% vs 全国25.8%)、プレゼン作成や英語タイピングを文房具のように使いこなしています。数学での「粘り強い思考」も全国トップクラスです。
 - **課題:** 家庭でのスクリーンタイム(動画・SNS)の長時間化や、悩み事を親に相談しない層が約3割存在することが懸念されます。
 - **対策:** 家庭での過ごし方の見直しと、時間的余裕の少ない授業中でも、生徒一人ひとりと向き合う「心理的な繋がり」の再構築に配慮します。また、アプリやメールでの個別相談や状態確認、相談受付電話の利用を周知徹底してまいります。
-

総評:

令和8年度調査の結果から、牛久市の子どもたちは「高い学力を備え、様々な授業形態や教材教具の利点を享受しながら学ぶ、自律的な学習者」へと成長していることが伺われます。これまでの方針転換が、確かな「知」として結実としてきている証だと思われます。今後は、この高い学力を土台としつつ、数値には表れにくい「心のケア」や「自己肯定感」の育成にさらに注力いたします。また、家庭でのスマートフォン等の使用時間の削減と読書時間等の増加に取り組むと共に、「デジタルとアナログの均衡」を保ちつつ、一人ひとりの子どもの声に寄り添う教育を、市全体で進めてまいります。